平成２９年度　第２回「島根県社会教育委員の会」会議

日　時　　平成３０年２月１６日（金）
　　１４：００～１６：００
場　所　　島根県民会館　３０３会議室

会　議　次　第

１　開　会

２　教育次長挨拶

３　出席者紹介

４　議　事
（１）協議・説明
①平成３０年度社会教育課新規事業（案）
②平成３０年度島根県立東部・西部社会教育研修センター事業計画（案）

③平成３０年度各種表彰（案）

（２）情報提供
①提言「2020 年代の県立高校の将来像について（案）」パブリックコメント版
②平成２９年度島根県公民館研究集会

５　意見交換
（テーマ）
～豊田委員の「日々の実践を通じて感じていること」を通じて、
今後の本県社会教育の在り方、方向性について考える～

６　その他

７　閉　会

平成29年第2回「島根県社会教育委員の会」会議出席者名簿

平成30年2月16日（金）14:00～16:00

島根県民会館　303会議室

氏　名	役　　職	出欠
有馬　毅一郎	島根大学名誉教授	欠
井上　晴美	島根県国公立幼稚園・こども園長会会長	出
岡本　修治	島根県公民館連絡協議会副会長	欠
賀戸　ひとみ	島根県連合婦人会副会長	出
佐田尾　志おり	江津市立渡津小学校校長	出
高尾　雅裕	山陰中央新報社　取締役編集局長	出
竹田　尚子	松江NPOネットワーク代表	出
千原　恵	島根県PTA連合会母親委員会委員長	出
土居　達也	島根県町村教育長会	出
豊田　庄吾	隠岐國学習センター　センター長	出
藤井　伸治	大田市立大田西中学校長	出
山根 久美子	公募委員	欠

松本　新吾	島根県教育庁教育次長

【事務局】

前田　秀典	島根県教育庁社会教育課長
江角　学	島根県教育庁社会教育課生涯学習振興グループリーダー
横田　康	島根県教育庁社会教育課社会教育グループリーダー
池田　哲也	島根県教育庁社会教育課社会教育グループサブリーダー
三島　伸仁	島根県教育庁社会教育課社会教育グループサブリーダー
福本　修司	島根県教育庁社会教育課社会教育グループ社会教育主事
森脇　淳志	島根県教育庁社会教育課社会教育グループ社会教育主事
糸賀　真也	島根県教育庁社会教育課社会教育グループ社会教育主事
岩本　悠	島根県教育庁教育魅力化特命官

平成29年度第2回「島根県社会教育委員の会」会議における発言骨子

日時：平成30年2月16日(金)14:00～16:00

場所：島根県民会館 303会議室

三島ＳＬ　平成２９年度第２回「島根県社会教育委員の会」会議を始める。島根県教育委員会教育次長が御挨拶する。

松本教育次長　本日は平成２９年度第２回「島根県社会教育委員の会」会議に御出席いただき感謝。それぞれの立場から地域の実態やニーズを把握され、社会教育における施策や事業の展開のために重要な役割を担っていただいていることに厚く感謝申し上げる。昨年度は、地方創生の実現に向けた本県の社会教育行政のあり方として、地域づくりを担う人づくりを進めることを内容とする答申を本会からいただいた。また、御承知のとおり、今後、新学習指導要領が順次全面実施される予定であり、来年度は、まず幼稚園において実施され、小・中学校においては移行期間が始まる。この新しい学習指導要領のキーワードの１つに「社会に開かれた教育課程」がある。これは、学校と社会が協働し、より良い学校教育を通してより良い社会をつくるという理念のもとに実現しようとするもの。一方本県においては「主体的に課題を見つけ、様々な他者と協働しながら答えのない課題にも粘り強く向かっていく力」という本物の力の育成に重点を置いている。このような力を育むために、これからの学校は地域との連携や協働の中で子どもの力を伸ばす必要がある。このようなことから、社会教育によって「学びを通した人づくり」と「地域づくりを担う人づくり」を進めている本県社会教育行政のスタンスは今後一層重要になるものと考えている。委員の皆様方におかれては、変化の早い社会の動きや多様で複雑な地域課題の解決に向けて今後も御意見をいただきたい。本日は委員の皆様から忌憚のない御意見をいただき、有意義な会となることを願い、開会にあたっての挨拶とさせていただく。

三島ＳＬ　教育次長は他の公務のため退席させていただく。本日の会議の進行は、協議・説明、情報提供、意見交換という順とさせていただきたい。有馬会長が病気で欠席のため、本会の組織運営等に関する要綱第３条の３により高尾副会長に進行をお願いする。

高尾副会長　要綱に従い代理を務め議事に入る。協議・説明事項３点の説明をお願いする。

福本社会教育主事　当課の平成３０年度新規事業を説明する。平成２９年度は資料２ページの１番・２番・４番の３事業によって公民館機能の強化を図ってきた。自ら手を挙げて事業に取り組む公民館は、これらの事業を使って力をつけ、公民館機能を高めている。一方で、これらの事業への興味関心はあるものの「採択されるような計画がつくれるか、プレゼンテーションができるか、年間を通して事業が実施できるか」などの不安があり、これらの事業に手を挙げることができない公民館があることもわかった。このようなことから、資料１ページが平成３０年度から始める新規事業「公民館はじめの一歩支援事業」である。自信がなく、事業に手を挙げることができない公民館が行う、新たに人を集わせる取組や学びの場を提供するような、公民館機能の初歩の部分への支援を行い、公民館職員の意欲向上や自信の再獲得を進める。また、設置者である市町村には、定期的な研修会やフォーラムを開催していただくことによって、公民館の取組を広げ、公民館の支援体制強化を図る。このような取組を通して、地域課題解決型事業やふるさと体験活動事業など、既存の事業に取り組んでいただく公民館を増やすことを狙っている。

糸賀社会教育主事　平成３０年度島根県社会教育研修センター事業計画を説明する。社会教育に関わる人材養成研修は多くのプログラムがある。対象別研修としては、社会教育委員・公民館職員・コーディネーター・地域づくりに主体的に参画するファシリテーター・親学ファシリテーターのブラッシュアップなどを計画している。全体研修としては、島根の社会教育の基礎的な考え方などを学ぶしまねの社会教育基礎講座と、しまねの社会教育実践交流会を計画している。その他、社会教育に関わる調査研究事業として、しまね学習支援プログラム「地域魅力化プログラム」の試行版を今年度開発した。今後市町村等に配布し、地域で活用していただいた意見を受けて、３０年度に完成版をつくる予定。また、市町村が実施する研修への支援も行う。

三島ＳＬ　表彰一覧を資料４～５ページに記載した。文部科学大臣・島根県知事・県教育委員会・県教育長別に区分している。様々な表彰があるが、最近は市町村に推薦依頼を行っても候補があがりにくい。委員の皆様も、該当する団体や個人を御存知なら来年度の早い段階で情報提供をお願いしたい。

高尾副会長　御質問、御意見をお願いする。

竹田委員　島根県の社会教育分野において、公民館が大事だということはここで学んできている。良かったと思うのは、苦しいと感じている公民館を把握して支援する動きである。ＮＰＯや地域の団体とつながっていく必要があると、お助けできることもあるのではないかと思う。一方で、地域住民として子育て世代が全く公民館に関われない現状をどう打開するのか、について具体的なアイデアを出さなくてはならない。自分は社会貢献や地域活動ばかりの生活を２０年松江で行っているが、公民館は貸し館としてしか付き合いがないのが現状である。というのは、平日昼間の公民館の活動に子育て世代は全く出られず、休日に公民館で行われるイベントに出掛けるのがせいぜいというのが実際のところ。平日昼間に家庭にいる人頼りであると、公民館との関わりにおいて、世代に穴があいてるという問題をどうにかしなくてはならないと思う。千葉県では公民館の開館時間を変え、平日の夜に公民館職員がいるようにしたと聞いた。公民館の負担をこれ以上増やすのか、との議論はあるかも知れないが、土・日曜日に公民館職員がいないという問題をどうするか、を考えながら公民館関係の資料を読ませていただいた。

高尾副会長　竹田委員からは社会教育関連団体と公民館とのつながりを視点とした問題提起をかねてからいただいている。事務局から一言お願いしたい。

横田ＧＬ　公民館の役割やあり方をどう考えていくのかは大きな課題と思っている。本県の考え方は、公民館は社会教育の本丸であり、その機能を充実していただくことである。そのために公民館の気付きを促しながら、公民館自体のステージアップを図っていく仕掛けを行っている。竹田委員の問題意識については認識しているが、マンパワーや予算なども含めると、そこまで辿り着いていない公民館もある。このような公民館をステージアップ・パワーアップさせていくことが県の社会教育行政の役割と思っている。また、公民館とＮＰＯ等がどのようにつながっていけばいいのかについては、今後も考えていかなければならないと認識している。

土居委員　竹田委員の御意見については、公民館職員の課題意識の持ち方の問題ではないかと思う。邑南町も中山間地であり、公民館に足を運んでいただく、活動に参加していた

だく方々は高齢者が多い。高齢者に負担がかかり、いろいろなことを活性化できない悩みもある。「子どもたちが公民館に来てくれ、次の世代を担ってくれるようにするためにはどのように活動を行うと良いか」が課題である。課題意識の持ち方として「若い女性や子どもを持っている女性や男性に入ってもらわないと成り立たない」という意識を持てば、それなりの活動が取り組まれると思う。そこをどのようにしていくかを公民館職員が研修の中で探っていく方法が良いと思っている。

賀戸委員　公民館長や主事の人選は市町村に任せているのか。職員によって公民館の質は変わる。地域のことを知っている方が望ましい。「あの人、誰？」という職員では地域の人は遠のく。人選のことや予算が少ないことを、本日欠席の岡本委員が嘆いておられた。雲城公民館は集落へ出向いて活動していると聞き、あのような素晴らしい館長さんが欲しい。人材不足を感じている。

横田ＧＬ　公民館は市町村所管であり、館長や主事等の人選は市町村にお任せしている。

高尾副会長　公民館のことについては、またの機会に時間をとって議論をしたい。続いて情報提供を２点お願いする。

横田ＧＬ　「２０２０年代の県立高校の将来像について（案）」を説明する。本県県立高校の今後の在り方を検討するために検討委員会が設置され、平成２８年４月から１６回の会議で検討を重ねて作成された。これは先月から２月５日までの間、パブリックコメントに出していたもの。本県教育の重要な取組なので配付させていただいた。

福本社会教育主事　平成２９年度島根県公民館研究集会について説明する。大雪の中２月７日に島根県民会館で開催し、運営スタッフも含め約５５０名の参加があった。島根県の公民館は全国的にも高く評価をされており、荒天の中これだけの人数が集まることも、日々熱い思いを持って公民館活動に取り組んでいる状況が顕著に表れていると考える。今年度、地域課題解決型の事業に取り組んだ３４公民館が実践発表を行い、その発表内容をもとに松江市の公民館職員のファシリテートによって意見交換を行った。来年度は浜田市での開催を予定している。

高尾副会長　次に意見交換を進めるにあたり、事務局から説明をお願いする。

三島ＳＬ　今回は豊田委員のお話を伺ったうえで意見交換を行いたい。豊田委員は２０１０年の隠岐國学習センター開所と同時にセンター長に就任された。同センターは県立隠岐島前高校と連携した公立塾であり、グローカル人材の育成という同高校と共通の目標を掲げ一人一人の進路実現を支援しておられる。また経済産業省の起業家教育促進事業で、全国３００校以上の公立学校にて起業家精神育成の授業実績をお持ちである。今回はそれらの経験からお話を伺い、その後委員同士での意見交換を行いたい。各委員の活躍フィールドは多岐にわたっているが、今回は豊田委員のお話を中心に据え、共通の素材を通して、今後の本県の社会教育のあり方を考えたい。お話のテーマは「日々の実践を通じて感じていること」である。

高尾副会長　今回は新しい趣向と思う。豊田委員にお話しをお願いする。

豊田委員　「日々の実践を通じて感じていること」というテーマでお話しさせていただく。まず自分自身の問題意識の変遷としては、８年前に東京からこちらにＩターンで移住してきた。元は大手情報出版会社に在籍し、その後転職した企業研修の会社で大人向けの人材育成と「社会に出てから必要な力がいかに大切なのか」を体験的に学ぶプログラムの仕事を全国の小学校・中学校・高校などでさせていただいた。このような仕事の中で、問題意識として自分が感じたことは、基礎学力だけでなく、生きる力、社会人基礎力がとても大事だということである。いろいろな仕事をすればするほど、学校教育で子どもたちと向き合う時に感じる課題感と、新入社員向け研修で新人に対して人事担当者や人材育成担当者が感じておられる課題感がリンクしてる、と思っていた。「有名大学を出た自分は大きな仕事を早くさせてくれ」という新人とも出会ってきた中で、自分自身も学生時代に刺激を受けたことはあるが、偏差値の高い有名大学に入ることも大事だと思うが、良い大学に入ることだけをゴールにすることは良くないのではないかと思う。仕事をする時に大切な力や、現場に受け入れられて仕事ができることが何より大事と思い、自分はそういった問題意識を持って８年前に島に移住した。しかし島に移住すると学力も大事だと感じた。最低限の基礎学力は大事だと感じながら、海士町でいろいろなことに関わらせていただいている。加えて、子どもが学力プラス生きる力を身につけるのも大事だが、そもそも海士町が

今後も２０年、３０年で人口が減り、地域自体の持続可能性が怪しくなってくる中で、地域の人たちが思う理想の状態になって行くために、地域の人が努力することが大事だと感じる。このような中で「一人一人が自立するための教育」も大事だが、「島の自立や、島が持続可能な状態になるために教育はどう関わるか」が大事であり、「そこに対して何ができるのか」という問題意識を持つようになった。魅力化プロジェクトは御存知の方も多いと思う。岩本悠君が書いた本には、隠岐島前高校の魅力化の軌跡が書いてある。この本には、高校が統廃合の危機から脱出し、高校存続のために一生懸命頑張った、第１フェーズのことが書いてある。現在は、危機的な状況から抜け出すことができた中で「今度は学校が持続可能な状態になるだけでなく、地域が持続可能な状態になるために、学校を核としてどのような人づくりができるのか」とチャレンジしている段階・フェーズである。そのような中で、ここで我々は「地域を育てるのか、人を育てるのか」「地域が自立するための教育をやっていくのか、子どもが自立するための教育をやっていくのか」を岩本君と一緒に考えてきた。多分「どちらか」ではなく、「地域文脈」と「人を育てるという教育文脈」の２つの文脈が混ざり合うことが非常に大事と感じている。魅力化の仕事に関わりながら、この１、２年は、思うように前に進めずに苦しんだ時期があった。その中で自分は地域文脈が強くなり、「地域の未来の担い手を育成していきたい、育てていきたい」と感じ、そのことを言えば言うほど「それは教育なのか」との指摘が地域内外からあった。子どもの自立が大切で子どもが自ら進路を決めることが大切なのに、地域に帰って来ることを言い過ぎてしまうと、「それは教育なのか」と言われる。繰り返すが、地域文脈と教育文脈どちらも大事である。それぞれの文脈でどういうことが言えるのか、自分なりに整理したことをお話しさせていただく。まず地域文脈について。本日配られた「社教情報７８」にも書き、視察対応や講演の際にも話す内容なのだが２つの問いがある。１つ目の問いは「よそ者と地元の人との違いは何だろう」という問いである。違いの明確な線引きはできなくて、人によって異なるものである。５０年住んだくらいでは地元の人とは認めないと言われる人がおられ、なるほどと思う。石川県では親子３代くらい住まないと地元の人とは認めない、と視察に来られた方に教えていただいた。１個の円をイメージしていただきたい。「よそ者なのか地元の人なのか」という議論は円の内側か外側ではなく、円の中心にどれぐらい近いかという話かもしれない。総体的なものや、人によって違うものではないかと思う。私は８年前に外から移住したよそ者だと思っているが「おまえは地域のために頑張っているから、もう地元の人になってきている」と言う地域の方もおられる。

中山間地域に移住して何年経てば地元の人に変われるのか、と考えることもある。よそ者・地元の人というキーワードを残しながら、２つ目の問いは「誰が地域を担うべきか」という問いである。「担う」という言葉の定義も人それぞれだと思うが「よそ者と地元が一緒に担うべきか」「地元が担うべきか」「地元やよそ者関係なく、地域に対して思いがある人が担うべきか」を尋ねると、「住んでる皆で担えばよい」との回答が結構多い。皆で担えば良いと思うが、例えば祭りにおいて「神輿を担ぐ５０人中４８人がよそ者でも、その祭りは地元の祭りと言えるか、地元の人が見てどう感じるのか」という視点もある。自分がよそ者だからこそ「この地域を担うという行為のど真ん中には地元の人がいるべき」「地域の中で最も大切なことや地域で連綿と受け継がれたことには、文化や歴史を一番わかってる人がど真ん中にいるのが良い」と思う。「このように地域を担うという行為のど真ん中に地域の人間がいるべき」だとすると、「そのど真ん中で地域を担い、地域の未来を切り開く人をどう育てるのか」という問いも生まれる。ある県の新任校長向けの研修に参加された校長先生から「若い時、地域の人から『先生がうちの地域の子どもたちに勉強を教えると子どもたちの学力が上がって都会の大学に行って帰ってこなくなる。頼むから勉強を教えないでくれ』と泣きながら言われてとても複雑だった」との発言があった。この話における教育・勉強・学力という言葉は、恐らく狭義の教育、偏差値を上げる教育だと思う。地域の未来の担い手を育てようと思って教育すればするほど子どもたちの学力が上がり、外に出て行って戻って来ないこともあるのではないかと思う。増田前岩手県知事が「自分の知事時代の大きな失敗の１つは、県立高校のトップ校にお金をかけて投資して学力向上を徹底的に取り組んだこと。その結果、子どもたちは都会に出て戻って来なくなった。」と話しておられた。東井義雄著の「村を育てる学力」には「子どもが農村から都市に移行していくのも必然的動向だろうが、子どもが村に見切りをつけて都市の空に希望を描いて学ぶというのは余りにも惨めすぎると思う」「そういう学力は、出発点からして村を捨てる学力になってしまうのではないか」「村を捨てる学力ではなく、村を育てる学力を育てたい」と書かれている。「村を捨てる学力だけではだめではないか、村を捨てる学力と村を育てる学力のどちらも必要ではないか」が自分の仮説であり「村を育てる学力とは何か」を考えている。隠岐島前高校は少子化や教育環境の不安で生徒数が減った。そこで「地域の担い手を育成するのが同高校の役割」と設定し、地域で新しいなりわいをつくる人材、地域で仕事を継ぐことができる人材を高校で育てようと考えた。「学校を開く」という言葉はあるが、地域の未来を支える人を育てることは学校だけの役割ではなく、

学校と地域が一緒に取り組むことだと思う。次に「教育文脈・生徒文脈や、子どもが自立する汎用的な力を身につけるために何が必要なのか」をお話をさせていただく。文部科学大臣補佐官の鈴木寛氏によると「日本の教育課題は大きく分けて２つある。１つは、子どもの自己肯定感が非常に低いという問題。もう１つは『自分たちの頑張りによって社会が変わるかもしれない』と感じる子どもの割合が圧倒的に低いこと」とのことである。子どもたちの自己肯定感を高める学びをつくることが大切であり、子どもたちが自分と地域・社会がつながっていることを感じる学びが必要と感じている。島根県教育委員会が掲げる「主体的に課題を見つける」という、子どもに身につけさせたい力は私も必要と感じており「このような力を身につけるための学びはどのような学びであるべきか」を考えなくてはならない。「このような力を身につけるための学びが学校教育でできているのか」「我々が運営している塾でできているのか」と問い直すこと、問い続けることは大事だと思う。このような力を「誰が育てるのか、どこで育てるのか、どういう仕組みで育てるのか」を皆で考えなくてはならない。写真の右下は元島前の小学校の先生で、県の派遣社会教育主事制度を活用して魅力化プロジェクトのコーディネーターとして参画していただいた。社会教育を勉強すればするほど、魅力化と社会教育は一緒だと感じており、魅力化を推し進めるのは社会教育主事の仕事ではないかと思うこともある。後任の先生も、地域・学校・地域同士のつなぎなど、魅力化にとても貢献していただいている。「学校を開く」という言葉を、地域文脈において「地域の未来を切り開く人を育てる」と捉え、「誰が育てるべきか」を考えると、「地域の人が育てる」ことが合ってると思う。「どこで育てるべきか」を考えると、学校の中でのみ育てるのではなく、地域をフィールドに学んでいくことが真っ当だと思う。現在魅力化の取組は島前だけでなく県内幾つかの地域に広がりつつあるが、魅力化を理解していない人は、公立塾や寮をつくることが魅力化だと発言される。私は、それは魅力化ではないと思っている。魅力化が進んだポイントの１つ目は「組織を超えたチーム」である。学校教育の魅力を高めるためには、学校教育関係者の先生や管理職だけで考えないことが大事であり、地域の未来の担い手を育てるためには、地域の人や行政も入るべき。「我々はどのような地域を目指し、どのような人が必要で、どのような教育をすればいいのか」を組織を超えて対話をすることが大事であり、それができたところは魅力化が前に進んでいると感じている。ポイントの２つ目は「開かれた学校」であり、これは学校を開くことで地域の方々がどんどん学校に入ってきたと感じている。境界線をなくすというより、境界線を溶かしたり混ざるくらいが良く、外からどんどん入っ

てきていただき、一緒に学んでいただく、地域の方々が学びに関わっていただくことがポイントである。ポイントの３つ目の「共創的な学び」とは、子どもが学校の外にどんどん出て地域で学ぶことである。地域の方々が学校へ入っていただくかわりに、今度は子どもが学校から出て、人口減少・過疎・福祉・観光などの地域課題を教育として学ぶことが大事だと思う。学校だけを教育の場と捉えるのではなく、島全体を学校と位置付け、人口減少・少子高齢化・財政難など、普通に考えるとネガティブなことも教育リソースとして位置付けることが大事と思う。そのように考えると、人口減少や少子高齢化が圧倒的に進んでる島根県は教育リソースの宝庫であり、島根県が全国の最先端に一気に躍り出るのではないかと思う。「社会に開かれた教育課程」は、「教育を通じてどのように子どもを育てるか」ではなく「教育を通じてより良い地域社会をつくるという目標を持つこと、子どもにいろいろな力を醸成すること、子どもが地域社会に向き合い地域の人と関わりながらその力を育んでいくことが大事」と謳っている。学校の教育のあり方を管理職が考えるのではなく、学校を開いて地域の方々や行政に相談したり、いろいろな人と一緒になって考えることが魅力化だと思う。それを推し進めていくことが大切、と国も言っているが、以前から島根県が取り組んできたことに国がようやく追いついてきたと感じている。隠岐島前高校と我が塾がともに、知識や理論を教え込むだけの教育ではなく、学んだことをベースに実践を数多く行い、実践の中で足りないことはまた学ぶ、という形で理論と実践の間を行き来することが非常に大事と感じている。田植え・稲刈り・漁業など、地域のリソースを使った学びを行う。子どもたちがチームで地域に出て地域課題を見つける授業の一例を紹介する。韓国からの漂流ごみが多いことが地域課題だと考え、まずは実践として浜辺を掃除した。しかし日本製のペットボトルが多いことがわかり「啓発活動先は地元の人」という認識で学びのＰＤＣＡサイクルを回し、地域をフィールドに課題解決する、という仕立ての学びである。「地域をフィールドに全員学ばせるのは子どもを地域に縛っているのではないか」「グローバル志向で海外に出たい子どもや、アカデミックに探求したい子どももいるのに、何で地域に縛るんだ」と指摘をいただくが、地域を題材に学ぶことは、その地域にある課題の真正性があり、課題がリアルであるということ。インターネットを通じて外国の紛争・飢餓・貧困に興味関心を持つことも当然大事だが、自分の地域の困っている人やリアルな課題に対して子どもたちがリアルにアクションを起こし、時にはリアルに怒られ、リアルに悩み、リアルに友達に助けを求め、もう１回行動する。このリアルさが、実は汎用的な力を身につけることにつながるのではないかと感じている。隠岐國学習

センターという公営塾は小さな民家を借りてスタートした。この民家に島前高校生徒が１００人以上入ることになり、当然入り切れないので、新しい塾を作る際には多くの支援をいただいた。新しい塾ができるまでの移行期間は、町の公民館を使わせていただいたほか、県教育委員会の応援で隠岐島前高校を夜に使わせていただいた。新しくできた塾は、勉強するスペースだけでなく、古民家を改修したスペースもある。「地域に開く」と謳っても、教育に関わる組織や場所は敷居が高くて入りにくい面もあることから、入り口部分は古民家を改修し、塾なのかわらない曖昧な感じにして、お茶や民謡や古文書講座など地域に開かれたスペースとしている。縁側のように、内でも外でもないスペースをつくることで、偶然の出会いを演出しながら、子どもたちが地域の方々と関わる接点をつくろうと努力している。我が塾では英語や数学などの教科の勉強も行うが、ゼミ形式の授業は、子どもの状況や学校の教育内容の変化に合わせて、学校と連携しながら教育内容やプログラム変えている。「グローカルゼミ」というのは、役場や観光協会の職員や地域の方々が教える側として持つゼミである。高校２年生の冬からは「じぶん夢ゼミ」という、自分の学びたいことを掘り下げて考える場がある。将来やりたいことをさくっと決めるのではなく、１回深く深く自分に潜り、自分の過去の体験や、自分が大切にしていること、自分が探求したいことを潜って考える。潜った後に地域の方々に来ていただき、地域の方々にも自分の過去と向き合っていただく。このような関わりの中で、自分が本当に大事にしたい価値観は何なんだろうと再度考える。多様な職業人と関わりこの職業につきたいということではなく、人としてのあり方や何を大事にするかを多様な人と関わりながら学び、多様な視点や示唆を増やしていくことも学ぶ。このような人との関わりや地域や社会の課題との触れ合いを通して、子どもたちは、自分の夢ややりたいことをブラッシュアップや探求するだけでなく、自分の夢ややりたいことと地域や社会のために何ができるのか、の交わりを模索するようになる。「畜産で島を魅力化したい」と言う知夫村出身の子どもがいる。「海士町役場の課長は頑張っているが人はいつか引退する、これでは海士町が持続可能でないから、自分が３０歳になったら海士町に戻り町長になって挑戦の継承者になりたい」と頑張っている子どももいる。県外から来た子どもも地域の多様な人と関わるので、地域と自分との距離が縮まり郷土愛が醸成される。「島留学生として地域のために頑張りたい、Ｕターンでも Ｉターンでもない Ｓターンの第１号になりたい」と言う県外から来た子どももいる。これは「島で３年過ごした後は関東の大学に進学するが、お世話になった島に３０歳台前半でもう一回戻って来て貢献したい」というものであり、新しい定住・移住のあり方

にもつながると思う。地域の未来を支え地域の未来を切り開く担い手を育成する時のベースになるのは郷土愛だと思う。多くの小・中学校で取り組んでおられるふるさと教育やキャリア教育のように、地域の人・歴史との関わりや自然体験によって、郷土愛によるベースが醸成されると思う。地域課題や厳しい現状に向き合い関わることで、子どもたちが地域に対する当事者意識を持ち自分のこととして地域に関わることができると思う。次に「地域の本当の価値や良さに子どもたち気付くことの難しさ」について。島根の方々は奥ゆかしいので「この地域はすごい」などと言葉にされない。そのため、外と交流することががキーの１つになると思う。外から来られた方々の話を聞くことや、自分たちが地域の外や海外に行くこと。外からの目線で見ることや外の方々が言語化してくれることによって、自分の地域の価値に気付き、地域に対する誇りが醸成されると思う。１０と１万を比べると１万の方が多が、それを分数の分母にすると不等号の向きが逆転する。１０人の中の１人の役割や責任は、１万の中の１人の役割や責任よりも大きい。言葉をかえると、１０人の中の１人が頑張ることは、１万人の中の１人が頑張るよりも自分たちの未来に自分が貢献している感覚を持てる、数が少ないからできる教育があるのではないかと感じる。最後に、「学校を開く」はよく聞く言葉だが、「社会教育を開く」とはどういうことなのかを考えてみたい。「開く」ということは「ここまでしかしてはいけないという線引きを取り払うこと」ではないか。「社会教育が開く」という言葉からも、学校教育と比べると社会教育は開かれた教育であると思う。その「社会教育を開く」とはどういうことなのか、という問いを最後に残して、私からの話題提供とさせていただく。御清聴に感謝。

高尾副会長　「社会教育委員の会」ということで問題点を絞ってお話しいただき感謝。最後に投げ掛けかけがあった「社会教育を開く」というテーマで、最後に皆さんから一言ずつお話しいただきたい。ここからはフリートーキング、ディスカッションの意見交換を行う。どのような面からでも発言をいただきたい。

藤井委員　中学校勤務の立場からお話しさせていただく。最初の学力プラス生きる力ということについて。確かに学校ではその基礎・基本をしっかり教えなければならない、身につけさせなければならない。それから、生きる力ということで、社会に出た際に必要性がある力、社会人の基礎力は大事と思う。島根県でふるさと教育が始まった平成１７年に私は社会教育主事として当時の西部生涯学習推進センターに勤務していた。江津で「ふるさ

と教育フェスティバル」があった時に、フロアの高齢の方が「学校で学力をつけると言うが、みんな出ていくではないか」と言われたことがあった。今は大田西中学校に勤めており学校運営協議会がある。その年の学校運営について地域の方々から「こういう視点が必要ではないか、こういうところに力を入れてやってください」などの意見を聞き、お諮りしたうえで進める。今は学校評価の時期であり、「こんなところが弱かった」という声を地域からいただいたので、これから回答をする段取りになっている。地域の方々から地域について学ぶということでは職場体験学習がある。１年生は職場の様子について学び、２年生で実習行う。３年生では、職場体験推進協議会のメンバーになっていただいている地域の方々が学校で集約した生徒の希望やニーズをマッチングしてくださる。子どもたちにとって、学校職員でも保護者でもない、その他の人と関わる体験が大事だと思っている。地域の中に学校とは違った居場所があったり、声をかけていただく機会や褒めていただく機会が持てると良いと思う。学校評価については、子どもたちに評価させた。本校の校区は仁摩と温泉津で石見銀山の積み出し港にあたる。「自分の地域を誇りに思う、愛着がある」の割合が６、７割くらい。「ここに住みたい」の割合は半分少しくらいなので、このあたりをどう育てていくのか。「自分の地域は次は君たちが担うんだ」ということをどう伝えるのかが課題だと思っている。私は４月の職員会議で「私たちがお預かりしている子どもたちはこの地域の子どもである、その視点を忘れないように」と職員に話をしてから１年を始める。その視点を忘れてはいけないし、子どもたちにも「皆がここをこれから盛り上げていくんだ」と伝えたい。地域の方々から「中学生の頑張りは行事を見に行ってわかっています、すごいですね」とお褒めいただく一方、「学校で何が行われているのかわかりづらい、見えにくい、学校からの情報が足りない」との意見もあり、学校の課題として地域に返さなくてはならないと認識している。また、豊田委員の話を聞いて、地域の中で人と関わる、発見することを、学校として大事にしたいと感じた。

豊田委員　発言に同感。うちの子どもたちも結構変化してきている。興味深いと思ったことは、高校生に「将来、この地域に戻ってきたいか」と聞くと「東京行きたいです」と言う。「うちの地域がピンチになったらどうか」と聞くと「それを聞いたら翌日にでも荷物まとめて地元に帰ります」と言う。地域の良さを学びながら、リアルな大人と触れ合ったり、お世話をしてもらうことを通して「この人たちに恩返しをしなくてはならない」という気持ちが蓄積している。すぐに戻ることよりも外で学びながら自分が戻るべきタイミン

グで戻ることを感じてくれたら良い、そのようなベースをつくることが大事だと思う。戻れ戻れと言い過ぎるのは洗脳ではないかと言われるが、個人的には３つのことが大切と思っている。１つ目は、「この地域に戻って来い、この地域の未来を一緒につくろう」と大人が願いを言うこと。２つ目は、大人の願いは伝えるが、戻って来るかを選ぶのは子ども自身であるということ。３つ目は、子どもが戻って来たいと思うように大人が一生懸命頑張る、本気であること。これは社会教育につながるのではないか思う。

佐田尾委員　小学校勤務の立場からお話しさせていただく。お話を聞いてなるほどと感じた。県学力調査で「地域行事に進んで行事に参加しているか」の問いには肯定的な回答が多かったが、「地域や社会を良くするために何をするか考えているか」の問いは県平均より下がっており、校長として寂しい思い。地域に支えられながらふるさと学習を充実させていただいているが、子どもたちが地域に出て自分たちができることを考える場の設定ができていないと感じた。資料に江津市の嘉久志まちづくりコミュニティーの発表が記載されており、小学生の未来創造委員会の中核が海士で校長をしておられた先生である。このような動きが江津にあるので、どのように取り組んでおられるかのヒントをもらいながら学校教育に活かしたいと思う。

高尾副会長　海士町が火つけ役になっているというお話だったと思う。

竹田委員　昨日の子どもの貧困に関する研修会において、ネットワークでこの問題を解決するパネルディスカッションの登壇者は教育関係者が多く、皆さん行政と学校との結びつきしか発言されなかった。パネルディスカッションを聞きながら、学校と行政だけの連携ではだめ、地域に開くというのはこういうことなんだと、昨日の人たちに今日の話を聞いて欲しかったと感じた。諦めずに地域のあらゆる人が地域の子どもたちに関わっていく気持ちを持てるようにしたいと思う。昨日の研修会では、子どもたちが将来の自分の生活のしかたや働き方として、公務員と教員しか知らないとの話も出た。貧困家庭に限らず、今の子どもたちは、親と学校の先生としか付き合いがなく、親の仕事と学校の先生くらいしか知らない。親が働けない等で貧困家庭になると、学校の先生しか大人を知らないという状況がある。体験や大人との関わりの少なさは、今の子どもたちの多くの問題点であると思う。公民館との関わりや地域団体であるＮＰＯや団体など、親や学校以外の大人と知り

合っていく場を意識して生み出す必要を感じた。私もよそ者で、２０何年経ってもよそ者。娘には「世界に羽ばたけ」と言って育て、「帰って来い」と言ったことがない。しかし、今住む場所やこれから生きていく場で、必要としてもらえたり、評価してもらえた時に、島根が育てたことや島根から来たことを自信を持って言えると思う。島根でたくさんの方々に可愛がって育ててもらったので、島根のことが大好きだと娘も言う。大人は「帰って来い、一緒に町をつくろう」と願うことをやめてはいけないと思うが「外に羽ばたいた子どもたちも島根が育てた子どもだ」と自信を持って思いたい。人は人の中でしか育たないと言うが、あらゆる大人が子どもに関わり、子どもは「自分たちは社会を良くして行く一員だ」と気付けるように、大人の頑張る姿を見せ続けていきたい。

土居委員　地域に残って欲しいし、残すためだけが本当に教育なのか、洗脳じゃないかという点について。私は教育長をしており、学校教育と社会教育の両方を所管している。学校教育は学力を高める、社会教育はどうやって地域に残すか、この両方の仕事を同時に見ているが、やはり両方が必要だと思う。「社会教育事業に学校教育が関わってない、学校教育に社会教育が関わってない、教育委員会内の仲が悪いのではないか」との意見もいただく。親は子どもが幸せになってくれたら結局どこで生きてもいいのだと思う。自分の子どもに対しては本人の幸せを考えるが、親としての仕事が終わると「何故よその子どもはここへ戻ってくれないのか」と考える。親としての仕事が終わり地域の一員になったら地域のエゴになる。この２つをどうするかが今求められていると思う。それは答えがなく、どうしたらいいのかを考え続けて仕掛け、仕組み、悩みながら取り組んでいるのが各市町村の実情だと思う。その答えの見つけ方は、邑南町ではふるさとの思考を体験したり、地域課題を子どもたちと一緒に大人も考えて学びを仕組む。或いは、地域の大人が子どもをずっと応援し続けていたら、外に出てもふるさとのことは忘れず、地域課題を見つけて自分が一度外に出て学んで帰って来る子どもたちになるのではないかと思う。「学び過ぎたら外へ出る」とも言われるが、学んでいないと中山間地では生きていけない。農業や漁業にしても、自分で仕事を起こさなくてはいけない。ある議員が「田舎の子は看板抱えて仕事をしてるわけではない、名刺を出せばここかと言ってもらえるわけではない、だから力をつけないとだめだ」と言われた。「田舎で生きていける学力があれば都会でも生きていける」という考えで、子どもたちを育てることは大事だと思う。

高尾副会長　土居委員の話で興味深いと思ったのは、豊田委員の話にもあった「地域を捨てる学力と地域を育てる学力という２つの学力の見方で世間や社会的に見られているのではないか」という点。学校教育と社会教育について事務局から話を聞かせていただきたい。

横田ＧＬ　学校と社会の連携・融合をテーマとして学校教育と社会教育がいかに融合して子どもたちを育てて行くか、に傾注した時代があった。その時は派遣社会教育主事などが学校に顔を出し、社会教育と学校教育が一緒になって汗をかき、そこで生まれたのがふるさと教育だと思う。子どもたちを育てるためには学校教育と社会教育が一緒に取り組んで行かなければならないと思う。今は教育の魅力化という、社会教育にとって学校教育に関わる機会も生まれており、ふるさと教育で蓄積されたノウハウを活かしたい。

前田課長　今後子どもに身に着けさせるものは従来の学力以外のものが多くなるので、地域と連携して取り組まなければならない。学校教育と社会教育が強みを活かし合う、弱みを補い合う関係にしなければ、地域で育てる、新しい学力感、などの崇高な理念を掲げても進まないと思う。

井上委員　幼児教育は学校教育だが教科教育ではなく、まさに社会教育だと思う。豊田委員の話を聞き、本当にすごいプロジェクトだと思う。私は保育所長も兼ねている。保育所は福祉であり、就学前の子どもの教育の中にいる。子どもはまだ幼く、自分の将来を考えることはできないが、保護者の教育や社会参加のあり方は大きいと思う。若いお母さんたちは、公民館の図書館をおしゃべりやコミュニケーションの場として利用しておられ、そこで公民館職員に話しかけられ、小学校などの読み聞かせなどを頼まれることを通して、２０代や３０代前半の保護者も社会参加をされていく、と感じている。働き方改革という言葉が飛び交っているが、労働力不足で女性もどんどん社会に出て仕事をする。その子どもは保育所などに預けられ、女性も働こうという社会風潮になっているが、ひずみもあると思う。子どもが小さい時にしっかりと愛情を注ぐことができず、その経験が親にも子どもにもなくなりつつあることに危機感を感じている。豊田委員の話にあった「お世話をしてもらうことの大事さ」という言葉がそうだと感じた。松江市内は転勤族が多いことで幼稚園は成り立っている。子どもがおじいちゃんやおばあちゃんに触れ合う機会はないので、園が地域の方々と触れ合わせることが大事だと思っている。今は保育士不足・教員不足で

あり、地域の若いおじいちゃんやおばあちゃんが働いておられるが、社会貢献ができる方々が多く、全国的にも島根県はボランティア志向が高いと聞いている。ボランティア志向の高い方々と保育士不足が結びつくと、子どもたちはお世話をしてもらい、心も豊かに育つであろうし、子どもに接することによって高齢者の方々も心が優しくなれるということもあると思う。そのつなぎを公民館が取り持ってくだされば と思う。

千原委員 私は県のＰＴＡ母親委員長として参加している。私は奥出雲町を出たことがない。生まれ育ったところが好きで、外に出る考えはなく、近くの企業に勤め、縁あって町内へ嫁いで同居している。世代間交流と言われるが、おじいちゃんやおばあちゃんと孫の世代との関わりは密なものがある。その間にいる自分たち親は、長男だから残っている、長男の嫁だから同居しているところが周りにも多い。「自分たちが最後の世代だろう、子どもたちは出て行くだろう」という気持ちで育てているお母さんが多い。帰ってきて欲しい気持ちもある。しかし、帰って来ようと子どもが思うような、生まれ育ったふるさとや雰囲気を親が感じ、子どもたちに言葉や態度で伝えているか、が一番の問題だと思っている。学校と地域はふるさと学習で開かれ、地域の方々が学校に来てくださったり、学校から地域へ出向くこともある。一方で家庭と地域となると、例えば「とんどさん」などの行事に子どもたちは喜んで参加し「どこどこのおじちゃんからおやつをもらった、顔に墨を塗ってもらった」と言うが、親は家にいても参加せず、一緒に行こうとはならない。また、学校と家庭は開かれているようで意外と開かれてない、と学校の先生に聞いた。学校の行事があっても仕事の関係で参加できない家庭のことは、学校からも見えない、踏み込めないところがある。家庭状況が全く見えない家庭もあると聞き、祖父母と子どもに挟まれ、今一番支えて行く我々親世代が考えなくてはいけない。このことを持ち帰り、地元で発信することが自分の役目と思ったので、話を学校・地域・家庭でつなげて行きたい。

賀戸委員 海士町は岩本さんや豊田さんなど、外部から来られた方が活躍しておられる。そのような土壌の地域に行ってみたいと感じた。教員は２２才くらいで資格を取り、その時から先生、先生と持ち上げてもらっていることが良くないという意見を聞いたが、先生個人の性格によるものだと思う。以前は出雲部の先生が石見部に来て何年か勤務された際は、住民として御家族と一緒に住んでいただき、地域行事にも出てもらう、飲み食いも一緒にする、だったが、今はそのような姿がないので寂しい気がする。

高尾副会長　大事なことだと思う。それでは「社会教育を開く、社会教育にどのような視点や方向性を持ったら良いか」について各委員から意見や提言をお願いする。

竹田委員　ＮＰＯ、市民団体と関わりがあり、高齢者大学の卒業生の方々も社会教育と言っておられる。地域の行政や公民館ではない団体のことを思い浮かべた。市民団体・地域団体は大人が育つ場、社会教育の場であるということを自覚して活動をして行くと良いと感じた。県の社会教育施設や団体ではない小さいところも、大人が育つ場であると自覚して活動する。ＮＰＯでは「ＮＰＯ活動は借り物競争だ」と言うが、業種を超えた大人のつながりが社会教育を開くことにつながるのではないかと思う。

藤井委員　学校の立場として大事にしたいのは「人とつながることができる子どもを育てなくてはいけない」ということ。社会とつながることができる子どもを育てることが大事。豊田委員の話にあった、生きる力、社会人の基礎力が大事だと思う。学校では経験や体験できない場を社会教育で用意していただけるとありがたいと思う。私はふるさとの鳥井町で、まちづくりセンターの自主防災組織の立ち上げで設立委員に加えていただき、地域課題を住民が意識できる仕掛けが大事だと知った。行政からおりてきたところに住民を当てはめるのではなく、自分たちに何ができるだろうと考えて、お互いにつながっていく、そこを社会教育でつなげていただけるとありがたい、ということを体感した。

高尾副会長　豊田委員から発言をお願いしたい。

豊田委員　１つ目は、連携の境界線を曖昧にすることが大事。学校教育に入り、学校教育を一緒に取り組むことが社会教育の明確な役割だと思う。学校教育・社会教育・地域振興などを横串刺してプロジェクトをつくる。島根県教育委員会は他県に先駆けておられるので、そのようなところを取り組んでいただきたい。２つ目は、学校教育で主体的、対話的、深い学びがあるが、社会教育の研修や公民館活動の学びが、本当に主体的、対話的、深い学びになっているのかを、問い直すことも大事。３つ目は、今までの社会教育の答えを見つけてそれに基づくというあり方ではなく、社会教育の次の進化した姿は何なのかを探求し続けることが大事。答えを持っておられる方々が多いと思っており、成功体験や自分に自信があると、その答えが手放せなくなりがちである。「社会教育はこうあるべき」とい

うことを一旦置いて、次の社会教育のあり方を探求し続ける姿勢、一緒に探求しよう、というメッセージが大事だと思う。

千原委員　地域の子どもたちが人生をどのように歩もうとも、どこへ行っても「自分の原点は奥出雲だ、自分はこの町で育ちました」と胸を張って誇りを持って語れるふるさとを残さなくてはならないと思う。親として学び、子どもに地域の良さや魅力を正しく伝えることが大事で、答え探しや答え合わせは必要なく、それぞれの考え方でつながっていくことが大事。我が家だけでなくいつでも帰って来られる場所、地域の人もお帰りと迎えてくれる町としてこれからも地域を盛り上げたいと思う。

土居委員　学ぶ対象が開かれてるか、地域住民に対して社会教育が貢献できているかという問いかけは大事だと思う。竹田委員も言われたように、忘れ去っているのではないが、利用できていない方々もおられ、社会教育は誰に対しても開かれていないといけない。学び方が開かれてるか、については、島根県は地域課題解決型公民館を目指している。学校のふるさと学習も地域課題解決の学習だが別々である。子どもも大人も地域の一員であり、合わせた学び方が必ずあると思う。学校は学校、地域は地域で取り組んでいることにおかしさがあり、どうしたら学校と公民館で一緒になって課題を考えていく学び方ができるか、と考えている。学び方も開いて行かなくてはいけないと思う。

高尾副会長　「次の姿は何か」とはなるほどと思いながら話を聞かせていただいた。これまで地域・自然・伝統・ふるさとの温かさが魅力ということ、加えて、地域を発展させるためにどのような役割があるのか、例えば巨大なプラントや高速道路をつくりたい、ＪＲを新幹線にしたい、などの重厚長大な分野までは、社会教育のフィールドが提供できないと思う。ふるさと教育の枠を超えて産業教育や他の分野で取り組まれているのかも知れない。子どもの立場では、空港に行って飛行機を見て、それで将来を決めるということが当然あり、そのような機会を通して地域を何とかしたい気持ちを芽生えさせるものがあってもいいと思う。整理ができていないが、１つの意見として聞いていただければと思った。

井上委員　「社会教育を開く」、なかなか言えることではないかも知れない。島根県はどこに行っても豊かな自然が隣にある。そこでの人の文化が流れており、人がつないできた

ものであると思う。「そのようなところに子どもたちを連れ出したい、触れ合わせたい」ということが私の立場としての「開く」ということだと感じている。子どもたちが今生きている、生活している中で「本当に楽しい、幸せだ」という気持ちを持たせるためにどうするか。やはり地域の人と触れ合わせる、自然の中で思い切りきり遊ばせる、そういうことを大事にしたいと思う。

賀戸委員　昨年、一昨年と、県の教育長に「婦人会は社会教育団体」と言っていただいた。警察や消防との関わり・消費者問題・男女共同参画・結核予防・日赤など多くの活動を行っているが、会員が減っている。どうして減ってるのか。私たちが楽しそうに活動をしないからではないか、という答えが出つつある。また、別の課題は、今の子どもが歩かないこと。私の子どもは、３、４キロ歩いて保育園に通っていた。その間に農作業をしているお母さん・お父さん・隣のじいちゃん・ばあちゃんと話をしながら、１、２時間かけて、ゆっくりと地域の人と関わって育ったと思う。ニュージーランドへ行って帰って来ない子どももいるが、大学卒業後１０年くらいして「弥栄のこと、何とかならないか」と言って帰ってきた子どももいる。同じ親が育てても差があり、子どもの性格かと思いつつ、帰ってくれただけ良いかと思う。

佐田尾委員　１つ目は、学ぶ対象を開くということ。今月２３日に開催される、通学合宿をしている方々の研修会チラシが学校に回ってきた時に新しさを感じた。地域には、ボランティアの手助けはしても「自分が中心」には自信がない方々がおられるが、その人たちは立派に社会貢献をしておられる。改まって「ファシリテーターやリーダーのための研修」では行きにくいが、「自分が関わっている事業で皆さんが集まり皆さんと話す」であれば行きやすいので、これは良い研修だと感じた。「学ぶ対象を開く」ことで、自信のない人も出られるための工夫をすることも開かれた社会教育だと思う。２つ目は、社会教育主事の感覚を持った教員を各学校に配置すると良いと思う。

高尾副会長　御協力に感謝。進行を事務局にお返しする。

三島ＳＬ　高尾副会長の進行と各委員に感謝。最後に社会教育課長が御挨拶する。

前田課長　熱心に議論いただき感謝。４月に着任して以来、社会教育の広さと奥深さを感じている。それは社会教育がテーマの１つに「人を育てる、学ぶ」ことを根源的に持ってるからだと思う。従って社会教育は、社会の１分野にとどまらず、他の多くの分野や活動に影響する、川に例えると上流に位置する分野という特性があると思う。いろいろな切り口から社会教育の重要性が叫ばれており、社会教育の出動と活躍の場がますます増えている。島根の社会教育はアドバンテージある先進県と言われるが、その評価に躍らされることなく、我が地域は自らが守るという強い決意で各地域の方々が取り組む必要がある。市町村が設置者である公民館への支援と、殆どの市町村への社会教育主事の派遣は、人づくりを県と市町村がタイアップして取り組んでいる象徴的な手法である。制度のアドバンテージにあぐらをかくことなく、今後も県として、何が必要なのか、何が効果的なのかを考え続けていきたい。最後に、皆様は今年の６月２３日が２年間の区切りである。現任期中は、今日が最後の会議となる可能性が高い。２年間、多大な御尽力をいただき感謝。規定は再任を妨げないものとなっており、皆様方には就任を再度お願いすることもあるので、その際は可能な範囲で応じていただきたい。団体推薦の方々は、３月末から４月の組織内異動を見極めたうえで当方からお願いをさせていただく。

三島ＳＬ　以上で平成２９年度第２回「島根県社会教育委員の会」会議を終了する。